

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2192500060		
法人名	株式会社下平		
事業所名	さくら悠輪苑		
所在地	岐阜県安八郡輪之内町四郷288番地		
自己評価作成日	令和5年8月21日	評価結果市町村受理日	令和5年12月6日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kai.gokensaku.nhl.w.go.jp/21/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&g_yosyoQd=2192500060-00&ServiceQd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 旅人とたいようの会		
所在地	岐阜県大垣市橋町1丁目3番地		
訪問調査日	令和5年10月31日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・認知症になっても活躍の場を増やす活動として、ほっとステーション(社会福祉協議会が行っている地域サロン100円喫茶)でのボランティアに参加。

・食事は、買い物から調理、盛り付け、配膳、片付けまで全て利用者様と一緒にに行っている。

・入所しても、入所前と変わらない生活が出来るように、家族以外にもご利用者様の応援団であるお友達も契約時に教えて頂き、入所後も関係を続けてもらえるようにしている。

・互助助カフェ(認知症カフェ)を月1回開催し、地域の認知症ケアの拠点になるように活動している。

・共用型認知症デイサービスを運営している為、介護度が比較的低いご利用者様が多く、認知症が進んでもそのままGHIに入所して頂けるので、馴染みの場所で環境を変える事なく過ごしていただける。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「認知症があっても一人ひとりの自己決定する力」を高める事をモットーにしている。地域や住民と触れ合う機会を意図的につくり、事業所でのカフェや社会福祉協議会運営のサロンにスタッフの一員として参加している。住民向け認知症啓発講演会には、職員と一緒に登壇し、認知症への理解促進への役割も担っている。事業所での生活も利用者のできる事や得意な事が継続できるように、買い物、調理、洗濯等の家事全般を職員と一緒にを行い、生きがいや楽しみとなるように支援している。終末期の過ごし方を家族と一緒に話し合い、事業所での看取り後、事業所でのお別れ会やグリーフケアにも取り組んでいる。利用者と共に地域に積極的に出かけ、新しい取り組みに熱意を抱いている事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～42で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印	
43	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:15)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	50	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:8,9)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
44	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:14,27)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	51	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度ある 3. たまに 4. ほとんどない
45	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:27)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	52	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:3)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
46	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:25,26)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	53	職員は、活き活きと働けている (参考項目:10,11)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
47	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:36)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	54	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
48	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:20)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	55	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどいない
49	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:18)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)＋(Enterキー)です。〕

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅰ.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	玄関に理念である「小さな変化に目を向け、小さな声に耳を傾ける～それが職員でも利用者でも～」を掲げ、常に共有している。	理念を玄関や洗面所に掲示し、常に意識してケアできるようにしている。ミーティング時に管理者が実践できているか確認している。「認知症になってもやれることはたくさんある」という思いをもとに、利用者が発する言動や所作を見逃さず、自分から行動できるように働きかけている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で、難しかったが、互近助カフェを今年の7月より再開。また、地域との繋がりを作っていきたい。	地域に馴染み住民と触れ合う機会を増やす為に、事業所で近所の人を誘いカフェを開催している。社会福祉協議会が運営するサロンには、スタッフとしても参加し、買い物客や来店する住民と会話している。町や隣町主催のサロンにも参加している。		
3	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度からの新たな取り組みとして、同じ輪之内町にあるGHナンウエーブと合同で運営推進会議をこの7月に行って良い刺激になった。今後も4か月に1回は合同の運営推進会議を開催していく予定。	保険者の許可を得て町内の事業所と合同で会議を開催している。両事業所の特徴や取り組みを参考に、メンバーからも意見をもらい運営に活かしている。カフェ開催時は、町内の事業所からも参加があり交流している。		
4	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	輪之内町、安八町共に、認知症地域支援推進員を委託されている為、密に情報共有できている。	町の担当者や保険者とは、介護保険サービス以外の事についても話し合える関係がある。要介護認定審査員を就任し地域の重層的支援についても相談を受ける事がある。住民向け認知症の講演依頼を受け、利用者と一緒に演じた事がある。介護相談員の訪問は中断している。		
5	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年に1回は必ず身体拘束について1時間半の研修会を外部講師に依頼して行っている。常に意識して、しないように気をつけている。	身体拘束しない為の指針があり、利用者の行動を制止するような行為や言葉遣いは、その都度職員で話し合い、拘束しないケアに努めている。年1回、身体拘束についての研修を実施している。身体拘束防止の委員会は未整備であった。	身体拘束防止の委員会を設置し、3ヶ月に1回の委員会を開催し、議事録を作成し、職員間で情報共有に取り組まれる事が望ましい。	
6	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年に1回は虐待に対しての研修会を行っている。それ以外にも、ミーティングの時に職員同士で話し合う機会をもうけている。	高齢者虐待防止宣言を表明し、リビング入口に掲示し、意識づけできるようにしている。虐待防止の研修は年1回実施し、ミーティングで管理者が説明している。職員の自己振り返りの記録を作成し、不適切ケアにつながらないように取り組んでいる。		

グループホームさくら悠輪苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	年1回、権利擁護の研修会を行っている。		
8		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、分かりやすく丁寧にご家族が納得した上で契約していただくように心がけている。		
9	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びにに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	外部評価で受けたご家族様のアンケートを真摯に受け止め、ミーティングや運営推進会議で公開している。	面会時や介護計画作成時等で、家族に会う機会に意見や要望を聞いている。オンライン面会やラインでも意見を聞いている。月1回は、家族に日頃の様子を記した通信を送付し、意見をもらいやすくしている。家族からの意見は、内容に合わせて職員に周知している。	
10	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	年2回の職員面談時に、機会を設けている。意見に関しては、反映出来るようにしている。	年2回の職員面談時や月1回のミーティング時に、意見を聞いている。レクリエーションの材料や必要物品の購入等は、職員の裁量で対応できるようにになっている。備品の買い換え等の要望が言える関係で、ホワイトボードや洗濯機を買い換えている。職員の意見から記録をICT化し、業務負担軽減につなげた。	
11	(9)	○就業環境の整備 代表者は、管理者及び職員個々の努力や実績、勤務状況を把握するとともに、職員が向上心を持って働けるよう、ワーク・ライフ・バランスに配慮した職場環境や就業条件の整備に努めている	職員のスキルに合わせた研修への参加を促し、スキルアップにつなげている。	職員個々に面談し、家庭事情や健康状態に合わせ、短時間や日勤帯のみの勤務等の希望に合わせている。子連れ出勤も可とし、労働時間や残業等にも配慮している。福利厚生として制服の支給、年数回果物ギフト券や肉の現物支給があり、職員及び職員家族の楽しみや働きがいにもつなげている。	
12	(10)	○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	施設内研修では、月1回の研修や、職員のスキルに合わせた施設外研修に参加していただく。	事業所内研修は、身体拘束や虐待防止等を含め、職員の希望も入れて毎月実施している。外部研修の案内を周知し、希望を聞き受講を勧めている。参加費用は事業所負担で、業務時間とし、ズーム研修の場合は事業所で受講できる環境にしている。資格取得への支援やキャリアパス制度で職員のスキルアップにつなげている。	

グループホームさくら悠輪苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会づくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍で参加回数は減ってしまったが、今年から少しずつ交流が出来るようになってきている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
14		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員と利用者は、パートナーとして関係性を築けるように日々勤務している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
15	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者さんと普段から話をし、ニーズを聞き出せるようにしている。	日常の生活場面で利用者同士の会話から把握したり、家事等を一緒に行っている時の会話から把握している。ゆっくりと思いや意向を聞く場合もある。寝る時間やTVを見る時間等も本人の希望に合わせている。飲み物はメニュー表を見せて、本人が選択しやすくしている。	
16	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月一回、カンファレンスを行っている。事前にスタッフの意見を吸い上げて、次の支援に活かすように心掛けている。スタッフのスキルにバラつきがあり、統一したケアが難しい事がある。	利用者や家族から意見を聞き、担当者がケアマネジャーと一緒に介護計画を作成している。職員会議で毎月モニタリングし、必要時は変更している。事業所内のケア以外にも、本人がやりたいことや地域との交流も入れた介護計画にしている。	
17	(13)	○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録が簡潔になっている為、誰が読んでもわかりやすい記録を残してもらえるように声掛けをする。分からないことは記録者にその都度確認をして今後のケアに繋げている。	電子カルテを導入しアイパッドで入力や閲覧ができるようにしている。日に2回の申し送りと、連絡ノートにも記載し、職員へ確実な周知に努めている。ケース記録は特に注意点は赤字とし、赤下線の活用もしている。何がいつどうしたかを意識し記録を書き、職員間で違う解釈にならない努力をしている。	
18	(14)	○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	施設で対応できるかどうかにもよるが、出来るだけどんなニーズにも応えられるような対応を心掛けている。	「認知症になってもやれることが沢山ある」という事を地域に働きかける為に、利用者と共に地域に開かれた事業所として前向きに取り組んでいる。近所の住民を接待する事業所のカフェ、社会福祉協議会運営のサロンにスタッフとして協力できるように支援している。	

グループホームさくら悠輪苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の認知症カフェに参加したり、社協が運営しているほっとステーション(地域サロンカフェ)にボランティアで認知症当事者の利用者が店員として参加してもらえるように支援している。		
20	(15)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	足腰がしっかりしている方については、施設職員(看護師)で病院受診を行っている。	入居時に家族の意向で協力医に変更する利用者が多い。家族が同行しかかりつけ医を受診時は、日頃の様子を書面で渡し、受診後に家族から報告を得ている。家族受診が難しい時は職員が通院支援をしている。希望で歯科の訪問診療や鍼灸師のマッサージを受けている人もいる。	
21	(16)	○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	受け入れられる状態であるかどうかの確認の上、ご家族や本人が望まれる環境で生活出来るように対応している。日頃から、主治医との関係作りに努めている。	入院時は、家族や病院から情報を得て、病状が安定すれば面会に行き、病院関係者からも情報を得ている。事業所で生活できる基準を提示し、意向を家族に確認している。退院し事業所で生活する時はカンファレンスに参加し、食事や福祉用具等の詳細を確認している。	
22	(17)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	口からご飯が食べられなくなった時を機に、主治医と家族さんと意向確認をしている。その旨をスタッフにも周知し、支援方法の共有をしている。	契約時に「重度化対策、終末期介護に関する確認書」で意向を確認している。状態に合わせて医師や看護師が家族に説明し、本人の望む看取りをしている。摂取量が少ない時は栄養剤の補給や好きな飲み物、希望があれば点滴治療もしている。看護師が職員に指導し方針を共有し、家族と一緒に看取っている。	
23		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の連絡ツールは周知出来ているが、実践力を身に付けられる研修等は出来ない。		
24	(18)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、避難訓練の実施を行い備えている。声掛けまではできているが、地域との協力体制は築いていない。	火災や水害想定の実施を利用者と一緒に行っている。広範囲での水害被害が予想される為、町外の離れた系列施設への避難を想定している。水、米、缶詰等の備蓄品は、消費期限を確認して2階に保管している。訓練時に住民へ呼び掛けているが、協力が得られておらず夜間想定が確認できなかった。	地域との交流が多い関係があるので、訓練に住民の協力が得られるような働きかけを期待したい。夜間の職員のみで、非常時に落ち着いて行動できるように、夜間想定訓練が望まれる。

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
25	(19)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者様の性格や生活歴を把握して、その人に合った言葉使い声掛けを考え対応している。	排泄への誘導は、利用者の側で小声で声かけしている。その人に合わせた声の大きさやトーンで失礼のない言葉遣いになっている。居室入口の名札は掲げず、花の写真額を飾り、プライバシーの保護に配慮している。年1回、具体的な事例をあげて、検討する接遇研修を実施している。		
26		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の出来ること、出来ないことを観察し、利用者様が選択しやすい声掛けを心掛けている。			
27		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	出来る限り一人一人の声を聞き本人のペースで楽しく過ごせるよう、利用者様優先で働いている。			
28	(20)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	持っている力を活かし、又、継続出来るよう会話を楽しみながら共同作業を日課としている。	毎日の食事は、買い物、下拵え、盛り付けから後片付けまで、職員と一緒にやっている。日常の会話から食べたいものを把握し、寿司、ぼた餅や季節のメニューを取り入れている。弁当風に盛り付けたり、外食やテイクアウトも利用し、楽しみな食事になっている。		
29		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	その時の状態が分かるよう職員間で連携をとり、申し送りや記録を活用している。			
30	(21)	○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、その人にあった口腔ケア(歯磨き、うがい、ケアスポンジ、義歯洗浄)をしている。	食事前に、嚥下訓練となる健口体操、童謡を歌い、誤嚥防止に努めている。利用者の能力や口腔状態に合わせ、見守りや介助し口腔ケアをしている。義歯は、洗浄し夜間預かりにしている。傾眠傾向の人は、しっかり目覚めている時に食事をとってもらっている。		

グループホームさくら悠輪苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	排便チェック表を利用し、排便リズムを確認しながら対応している。定期的な声掛けやその人の動きを見て、早めのトイレ誘導をしている。		
32		○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々に応じた入浴の支援をしている	入浴日は決まっているが、入浴時間は本人の希望、気分により変更し、できる限り気持ちよく入れるよう対応している。		
33		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	環境を整え、清潔な寝具、室温に気をつけている。本人の希望や状況をみて、居室又はソファで休息できている。		
34	(22)	○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の種類を薬情で確認。利用者様の体調変化に注意し、気になる症状は、早めに看護師に報告している。	服薬時は、複数の職員でタブレットで確認しつつ、日にち、朝昼夕、名前を呼び上げて確認している。空き袋をリーダーが確認後に廃棄するルールにしている。錠剤やカプセルの飲み込みが困難な人は、医師と薬剤師に相談し、無理なく飲めるようにつぶす等の支援をしている。	
35	(23)	○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者に合わせた役割を提供している。細かい作業が好きな方や料理が得意な方など、一人一人に合わせた支援をしている。	利用者のできる事や得意な事が役割として、日課の中で継続できるようにしている。買い物、調理、シーツ交換、お絞りと新聞たたみ、洗濯物干しやたたみ、カフェやサロンの手伝い等を一緒にやってもらっている。認知症があっても張り合いや楽しみとなるように支援している。	
36	(24)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	地域との関わりを持つための外出支援を行っている。買物を一緒に行き、本人の希望の物を購入したりしている。	花見、神社、買い物や自宅へ帰省等、本人の希望に合わせ、家族の協力も得て外出している。週2回は食材の買い物に、近隣のスーパーに出掛けている。町外の認知症カフェへの参加やサロンの手伝い等、今散歩したい方にも職員が付き添っている。コスモス、梅、桜の花見はドライブで気分転換を図っている。	

グループホームさくら悠輪苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を持つての支援はなかなか難しく出来ていない。買い物はスタッフが支払いを行っている。		
38		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を持っている利用者様は自身でやり取りしている。その他、希望があれば携帯でビデオ通話などして、コロナ禍の面会出来ない時など対応していた。		
39	(25)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	空調に気を配り、動線がスムーズになるよう、物の配置を考えている。季節に合わせた飾りをし、季節感を取り入れている。	リビングや廊下に手作りカレンダー、絵、季節の飾り物、共同作品や書道作品等を飾っている。TVを見る、新聞や本を読む、会話をする等自由に過ごせるようにソファを置いている。空気清浄機を設置し、乾湿計で室温の確認、適度に換気、手すりやドアノブ等を消毒し、感染症予防にも心掛けている。	
40		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	気の合った利用者様同士が落ち着ける場所を提供している。テーブルやソファなど一人一人に合わせている。		
41		○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	昔から馴染みのあるもの、安心できるものなど置き、居心地よく過ごせるように工夫している。		
42		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	お風呂、トイレなど、表示し分かりやすくしている。ユニット間の移動もスタッフが見守り出来るようになっている。		

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2192500060		
法人名	株式会社下平		
事業所名	さくら悠輪苑		
所在地	岐阜県安八郡輪之内町四郷288番地		
自己評価作成日	令和5年8月21日	評価結果市町村受理日	令和5年12月6日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kai.gokensaku.nhl.w.go.jp/21/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&i_gyosyoQd=2192500060-00&ServiceQd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 旅人とたいようの会		
所在地	岐阜県大垣市橘町1丁目3番地		
訪問調査日	令和5年10月31日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～42で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印	
43	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:15)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	50	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:8,9)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
44	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:14,27)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	51	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度ある 3. たまに 4. ほとんどない
45	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:27)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	52	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:3)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
46	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:25,26)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	53	職員は、生き生きと働けている (参考項目:10,11)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
47	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:36)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	54	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
48	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:20)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	55	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどいない
49	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:18)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。〕

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	玄関に理念である「小さな変化に目を向け、小さな声に耳を傾ける～それが職員でも利用者でも～」を掲げ、常に共有している。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で、難しかったが、互近助カフェを今年の7月より再開。また、地域との繋がりを作っていきたい。		
3	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度からの新たな取り組みとして、同じ輪之内町にあるGHナンウエーブと合同で運営推進会議をこの7月に行って良い刺激になった。今後も4か月に1回は合同の運営推進会議を開催していく予定。		
4	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	輪之内町、安八町共に、認知症地域支援推進員を委託されている為、密に情報共有できている。		
5	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施設を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年に1回は必ず身体拘束について1時間半の研修会を外部講師に依頼して行っている。常に意識して、しないように気をつけている。		
6	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年に1回は虐待に対しての研修会を行っている。それ以外にも、ミーティングの時に職員同士で話し合う機会をもうけている。		

グループホームさくら悠輪苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	年1回、権利擁護の研修会を行っている。		
8		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、分かりやすく丁寧にご家族が納得した上で契約していただくように心がけている。		
9	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	外部評価で受けたご家族様のアンケートを真摯に受け止め、ミーティングや運営推進会議で公開している。		
10	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	年2回の職員面談時に、機会を設けている。意見に関しては、反映出来るようにしている。		
11	(9)	○就業環境の整備 代表者は、管理者及び職員個々の努力や実績、勤務状況を把握するとともに、職員が向上心を持って働けるよう、ワーク・ライフ・バランスに配慮した職場環境や就業条件の整備に努めている	職員のスキルに合わせた研修への参加を促し、スキルアップにつなげている。		
12	(10)	○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	施設内研修では、月1回の研修や、職員のスキルに合わせた施設外研修に参加していただく。		

グループホームさくら悠輪苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会づくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍で参加回数は減ってしまったが、今年から少しずつ交流が出来るようになってきている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
14		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員と利用者は、パートナーとして関係性を築けるように日々勤務している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
15	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者さんと普段から話をして、ニーズを聞き出せるようにしている。		
16	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月一回、カンファレンスを行っている。事前にスタッフの意見を吸い上げて、次の支援に活かすように心掛けている。スタッフのスキルにバラつきがあり、統一したケアが難しい事がある。		
17	(13)	○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録が簡潔になっている為、誰が読んでもわかりやすい記録を残してもらえるように声掛けをする。分からないことは記録者にその都度確認をして今後のケアに繋げている。		
18	(14)	○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	施設で対応できるかどうかにもよるが、出来るだけどんなニーズにも応えられるような対応を心掛けている。		

グループホームさくら悠輪苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の認知症カフェに参加したり、社協が運営しているほっとステーション(地域サロンカフェ)にボランティアで認知症当事者の利用者が店員として参加してもらえるように支援している。		
20	(15)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	足腰がしっかりしている方については、施設職員(看護師)で病院受診を行っている。		
21	(16)	○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	受け入れられる状態であるかどうかの確認の上、ご家族や本人が望まれる環境で生活出来るように対応している。日頃から、主治医との関係作りに努めている。		
22	(17)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	口からご飯が食べられなくなった時を機に、主治医と家族さんと意向確認をしている。その旨をスタッフにも周知し、支援方法の共有をしている。		
23		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の連絡ツールは周知出来ているが、実践力を身に付けられる研修等は出来ていない。		
24	(18)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、避難訓練の実施を行い備えている。声掛けまではできているが、地域との協力体制は築いていない。		

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
25	(19)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者様の性格や生活歴を把握して、その人に合った言葉使い声掛けを考え対応している。		
26		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の出来ること、出来ないことを観察し、利用者様が選択しやすい声掛けを心掛けている。		
27		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	出来る限り一人一人の声を聞き本人のペースで楽しく過ごせるよう、利用者様優先で働いている。		
28	(20)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	持っている力を活かし、又、継続出来るよう会話を楽しみながら共同作業を日課としている。		
29		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	その時の状態が分かるよう職員間で連携をとり、申し送りや記録を活用している。		
30	(21)	○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、その人にあった口腔ケア(歯磨き、うがい、ケアスポンジ、義歯洗浄)をしている。		

グループホームさくら悠輪苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	排便チェック表を利用し、排便リズムを確認しながら対応している。定期的な声掛けやその人の動きを見て、早めのトイレ誘導をしている。		
32		○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	入浴日は決まっているが、入浴時間は本人の希望、気分により変更し、できる限り気持ちよく入れるよう対応している。		
33		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	環境を整え、清潔な寝具、室温に気をつけている。本人の希望や状況をみて、居室又はソファで休息できている。		
34	(22)	○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の種類を薬情で確認。利用者様の体調変化に注意し、気になる症状は、早めに看護師に報告している。		
35	(23)	○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者に合わせた役割を提供している。細かい作業が好きな方や料理が得意な方など、一人一人に合わせた支援をしている。		
36	(24)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	地域との関わりを持つための外出支援を行っている。買物を一緒に行き、本人の希望の物を購入したりしている。		

グループホームさくら悠輪苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を持つての支援はなかなか難しく出来ていない。買い物はスタッフが支払いを行っている。		
38		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を持っている利用者様は自身でやり取りしている。その他、希望があれば携帯でビデオ通話などして、コロナ禍の面会出来ない時など対応していた。		
39	(25)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	空調に気を配り、動線がスムーズになるよう、物の配置を考えている。季節に合わせた飾りをし、季節感を取り入れている。		
40		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	気の合った利用者様同士が落ち着ける場所を提供している。テーブルやソファなど一人一人に合わせている。		
41		○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	昔から馴染みのあるもの、安心できるものなど置き、居心地よく過ごせるように工夫している。		
42		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	お風呂、トイレなど、表示し分かりやすくしている。ユニット間の移動もスタッフが見守り出来るようになっている。		